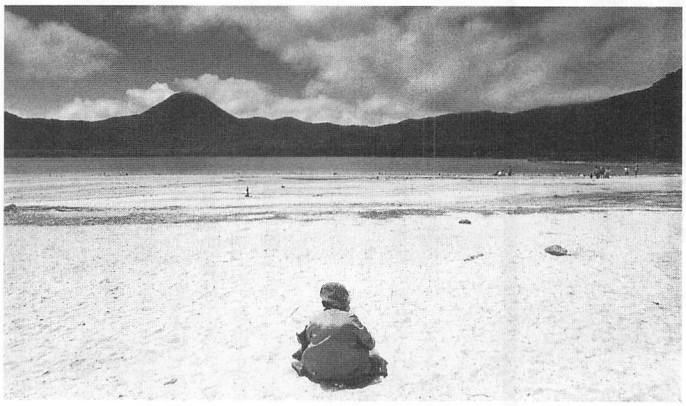
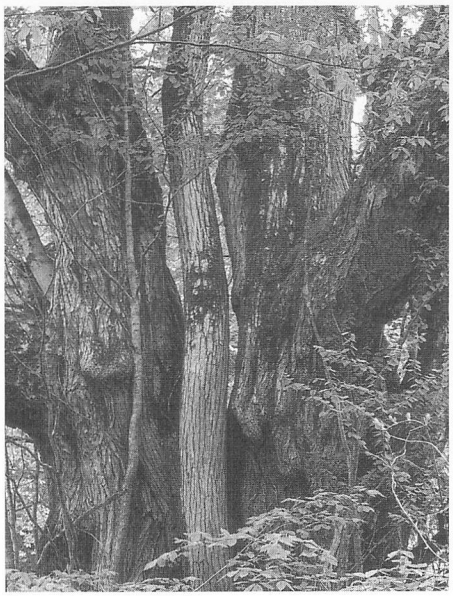
ALL SORTS 33

光と影の凝縮。

ファインダーを覗いた瞬間、
事実は事実以上のものにもなるし、
それ以下の存在にもなる。
そのことに慄然とし、
また、非常な興味を憶える。





PHOTOGRAPHER

倉本義久

【YOSHIHISA KURAMOTO】

今から十九年前。

彼は東京銀座のニコンサロンで「もぐらの家」と題する写真展を開いていた。それは東京江戸川にある身障者授産施設を取材したものだった。一日二〇〇円の賃金・食費は四〇〇円という施設の模様を新聞報道で知り、ショックを受けたのが、この個展のきっかけだった。

日大を卒業後、さる広告写真会社に暗室マンとして勤務した彼は、最初の一年間、カメラを携えることなく施設に通っていた。一年遊びに通いつづけて、ようやくレンズを向けられるようになったという。

そしてシャッターを切りだす頃には施設に住み込んでしまっていた。約半年間、施設で暮らした中で撮り溜めた一枚一枚。それがようやくニコンサロンでの個展となって完成をみていた。

だが、会場に座った彼はある種の焦燥感に苛まれていた。写真展にやって来るのはさも"自分も写真やってます"と言いたげな者ばかりだった。"先生"とおぼしき人物は皆、ただ彼に一言、「おめでとう」・・・・

そんなものなのかと思った。それだけのことだったのか、と考え込んだ。そうするうちに、醒めてゆく自分自身に気付いた。写真会社を退職、写真そのものからも離れた。東京を発ち、再び京都へと戻った。

そして四年後。

中京区で喫茶"ドラマ"のマスターとして働くうちに、再びカメラを手にしはじめた。ぽつぽつと写真が溜まってくると、やはり発表したくなる。だが今さらニコンサロンでもない。さりとて、編集者が介在、一〇枚出した写真が三枚しか使われない雑誌でもなかった。

ふと、喫茶店の壁に目がとまった。さっそくベニヤ板を打ち付け、クロスを張り込んだ。一九八二年、写真ギャラリー『京都写真壁』はこうして誕生した。

この『写真壁』、当時はかなり話題になった。八十七年に喫茶ドラマが閉店するまで彼自身も"徒然草"シリーズなど二十回あまりの個展を開催。一般にも二週間サイクルで無料開放、延べ一三〇回あまりの個展が切れ目なくつづけられたという。

また、この五年間に彼は京都を舞台にさまざまな活動を展開している。イベント『京都ライヴストリート』では、祇園祭に合わせて市内十二箇所のギャラリーで同時多発的に写真展を主催。また、『祇園祭アートフェスティバル』を市内二十数ヶ所のギャラリーと二〇〇名以上の参加者で開催したこともある。

フライパンを片手に喫茶店を経営しながら、ユニークな写真活動を行なう彼の行動は東京にも波紋を投げ掛けたようだ。あの東松照明氏(全国的に著名な写真家)も彼のイベントや、喫茶ドラマに足を運んでいる。

写真家のためにあるのではなく、写真を撮る人だけのサロンでもない。一杯の珈琲を楽しむためにやって来る、多種多様な人々のためにつづけたという京都写真壁。

「東京に居る頃は写真で飯を食いたくて。そういう意味ではニコンサロンも勲章だったし、それでなんとか、という気持ちも正直あった。そのころはいつも、写真を"つくらなければ"、とばかり考えていた。でも、今は、写真は"あるとしか考えていない」

まったく迷いのない五年間だった。しかし、個展『光の彼方へ』をはじめた頃から、ふたたび彼の中で何かが変わった。もう一度、まっさらな気持で写真と取り組みたい。そんな想いに捉われた彼は、以降、昨年暮れまでコマーシャル撮影に没頭した。アシスタントとして一から修業、その過程の中で未だ自分の知らない写真を発見しようと試みたという。

現在、フリーのカメラマンとして独立、非常に"ニュートラルな日々"を過ごしている。青白い自意識をガリガリと削りながら写真論を闘わせた頃を微笑みながら、さらにあの頃よりも熱意を持ってファインダーを覗くことができるようになったとも語る。

「僕は、撮った写真は現場にかえすことにしているんです。ドキュメントなら、必ずその地域のいろんな人々に見てもらうことにしている。これも、返すことにつながっているんです。その時々の立場や状況で現場に返すという意味はさまざまに変化しますが、今の自分にとって、とても大事なことのように感じているのですよ」

ドキュメントを指向するカメラマンと話していると、その言葉や経歴の中に、時として鮮烈な流れを見いだすことがある。それは一葉の写真に、事実という名の夥しい光と影を、歩き、語り、触れながら凝縮してゆく作業と、その繰り返しの中で自然に生まれてくる言葉や姿勢に圧倒される?からなのかも知れない。

「ファインダーを覗いた瞬間、事実は事実以上のものにもなるし、それ以下の存在にもなる」

そう語った彼、倉本義久氏の言葉を今、改めて思い起している。写真機と被写体、その間に揺らめく写真的現実について、それを感性と安易に結論づけることに一抹のためらいを憶えながら、カメラマンという不思議な人種に想いは尽きない。

文・三村　渓
写真・倉本　義久

PROFILE

一九四九年生まれ。京都府綾部市出身。日本大学経済学部卒業後、日本コマーシャルフォトに入社。東京都江戸川区民センターにて『発掘の声』個展を皮切りに多彩な写真活動に入る。二十五才当時に東京銀座ニコンサロンで『もぐらの家』個展を行なうがそれ以降、暫時写真活動から離脱。京都に戻って四年後、"喫茶ドラマ"内に設立した『京都写真壁』より再び写真活動を再開する。その後、京都各地でさまざまなイベント・写真展を開催。東京・渋谷での個展『光の彼方へ』や、新宿での個展『木』を経て現在に到る。仲間内では二匹の猫と二匹の犬に囲まれて暮らす、愛犬・愛猫写真家?としても有名。